

室町時代の屋敷地の調査

たか お み や ま え
高尾宮ノ前遺跡

たか お
津山市高尾

一般国道53号（津山南道路）改築工事に伴い、津山市高尾に所在する高尾宮ノ前遺跡で、令和4年3月から発掘調査を行っています。

この遺跡は津山市街地の南西にある嵯峨山^{さがやま}の丘陵南東端に位置しており、吉井川支流の皿川^{さらがわ}と倭文川^{しとりがわ}の合流地点が見渡せます。7月から調査を行っている2区は、丘陵南斜面が緩やかになるところで、主に古墳時代後期や室町時代などの遺構を確認することができました。また、遺構には伴わないものの縄文時代早期や後期、弥生時代中期～後期の遺物なども出土しました。

縄文時代の遺物は、早期の狩猟用の石鏃^{せきぞく}や異形部分磨製石器^{いけいぶぶんませいせつき}、後期の深鉢^{ふかばち}などが出土しています。中でも異形部分磨製石器はチャート製で、表面は滑らかです。形状は石鏃によく似ているものの、先端部分が丸みを帯び、実用的ではないことから、祭祀などで用いられたと考えられており、岡山県内での出土数は限られています。

古墳時代後期の遺構は、掘立柱建物^{ほったてばしらたもの}1棟、土坑墓^{どこうぼ}1基、柱穴列^{ちゅうけつれつ}3列などが見つかりました。土坑墓からは供えられたと考えられる6世紀末～7世紀初頭の須恵器杯身^{すえきつきみ}・杯蓋^{つきふた}各2点が出土しました。



空からみた高尾宮ノ前遺跡2区（北上空から）



石鏃（左）と異形部分磨製石器（右）



土坑墓の須恵器検出状況

室町時代の遺構は、丘陵を造成した平坦面で掘立柱建物8棟と溝などが見つかりました。「コ」の字形の溝が掘立柱建物を区画しており、出土遺物から15～16世紀の屋敷地であったと考えられます。

掘立柱建物は、側柱建物5棟と総柱建物3棟を確認し、いずれも棟方向が揃っていました。床面積は、大きなものでは3×3間の側柱建物で約43㎡、3×3間の総柱建物で43.7㎡を測ります。このうち、総柱建物は区画の中央部分に位置していることから、主屋である可能性があります。建物の柱穴は深く、柱材が残存しているものもあります。中には底面に根石や礎板がみられるものもあり、柱の沈下を防ぐ工夫がされていたことがわかりました。掘立柱建物は重なる位置で見つかったことから、建て替えを行っていたと考えられます。

また掘立柱建物群を囲む溝は、北東にある谷へとのびることから、雨水を谷へ排水する目的があったと考えられます。排水のために、元の谷地形を利用するなど、当時の土地利用のあり方も明らかとなりました。

遺物は土師器皿、備前焼の播鉢や甕・壺、天目茶碗、中国製の染付、青磁・白磁の碗や皿などが出土しました。茶道具である天目茶碗や中国製の染付が出土していることから屋敷地に暮らしていた人々の生活水準の高さをうかがい知ることができました。

調査の結果、縄文時代から室町時代までの長期的な人々の活動の痕跡が明らかとなりました。中でも中世の屋敷地を良好な状態で確認することができ、室町時代の津山地域の歴史を解明する上で、貴重な成果となりました。

これらの調査成果を報告するために、令和4年12月17日（土曜日）に地元住民の方を対象に現地説明会を開催し、多くの方にご参加いただきました。（藤井雄一）



室町時代の屋敷地（上が北西）



柱材の検出状況

美作市古町に所在する尾崎遺跡では、一般国道429号改築工事に伴い、令和4年5月から10月まで発掘調査を実施しました。

本遺跡は吉野川^{よしのがわ}と後山川^{うしろやまがわ}の合流地点を中心に発達した谷底平野に立地する、弥生時代から室町時代にかけての集落遺跡です。今回の調査で弥生時代の堅穴住居^{たてあなじゅうきょ}や溝、奈良時代から室町時代の掘立柱建物や溝、炉^ろが見つかりました。炉は周辺で出土した鉄滓^{てつさい}の特徴から鉄製の道具を作ったり修理を行った鍛冶炉と考えられます。

出土した遺物には、縄文土器、弥生土器のほか土師器、須恵器の椀や皿、備前焼の播鉢や甕、青磁、白磁、天目茶碗、瓦質土器の鍋や釜に加え、土錘^{どすい}（魚を捕る網のおもり）、羽口^{はぐち}、石製の硯^{すずり}、鉄釘^{てつくぎ}などの鉄製品などがあります。須恵器の中には勝間田焼の他に、播磨地域で製作されたものが含まれ、地域間の交流が推定できます。

今回の調査と、平成17・18年度の調査によって、各時期の人々の生活域は四方約300m以上に広がっていることがわかりました。（西村 奏）



弥生時代中期の竖穴住居（東から）



奈良時代以降の炉（南西から）

みずえ
水江遺跡

倉敷市水江

水江遺跡は県下三大河川の一つ高梁川^{たかはしがわ}の下流に位置する集落遺跡です。高梁川河川整備事業に伴い、令和4年11～12月に発掘調査を行いました。今回の調査地は倉敷大橋を挟んで2か所に分かれており、上流側を1区、下流側を2区として調査を進めました。

1区では古墳時代後期の土坑や室町時代末頃の溝などが見つかりました。室町時代末頃の溝では、完形の小皿や皿、銅銭^{どうせん}が1か所からまとまって出土しています。

2区では縄文時代後期から晩期頃の土器片が出土した浅いたわみ状^{かどう}の遺構が見つかりました。また、弥生時代後期の土器を含む溝や鎌倉時代から室町時代にかけての河道の一部も確認しました。

（北門幸二郎・森本 蓮）



水江遺跡遠景（北から）



1区 小皿出土状況（東から）

令和4年度企画展2

令和4年11月9日（水曜日）から、センター展示室で令和4年度企画展2「横穴式石室の世界」を開催しています。

当センターでは令和2年度から「吉備路の歴史遺産」魅力発信事業の一環として、総社市に所在する国史跡こうもり塚古墳の調査と研究を行ってきました。こうもり塚古墳は岡山県で最も大きな横穴式石室をもつ古墳として知られており、令和3～4年度にはこれまで調査されていなかった墳丘の発掘調査を実施しました。その結果、古墳の正確な形や築造の方法が明らかとなるなど、多くの成果を得ることができました。本企画展は、こうした「吉備路の歴史遺産」魅力発信事業の成果を紹介するとともに、こうもり塚古墳をはじめとする横穴式石室がつくられた時代と石室で行われた埋葬と儀礼について紹介するものです。

展示室では、こうもり塚古墳の横穴式石室から出土した須恵器や陶棺の蓋・身の一部、とうかん
たんほうかんとうつかがしら
単鳳環頭柄頭（レプリカ）を展示しています。
また、墳丘の発掘調査によって明らかとなった、古墳の規模と形状、墳丘の構築方法についての最新情報を紹介するほか、陶棺の新たな復元案など古墳の総合的な研究の成果をパネルで解説しています。

そのほか、岡山県南部の横穴式石室をもつ古墳で出土した資料を展示し、吉備地域における横穴式石室の導入や石室内で行われた埋葬と祭祀、6世紀の人々の^{よそお}装いについて解説しています。主な展示品としては、横穴式石室の中で行われた祭祀に用いた須恵器などの土器類、石室内に副葬されたきらびやかな装飾をもつ武器、馬に乗るための馬具、玉類や耳環などの装飾品があります。

会期は令和5年4月16日（日曜日）までとなっています。

なお、令和5年3月4日（土曜日）に岡山県立美術館で、こうもり塚古墳の実像に迫るシンポジウム「吉備最後の大型前方後円墳とその時代」を開催し、多数の参加者を得ました。（四田寛人）



展示の様子



こうもり塚古墳の陶棺



武器・馬具と装飾品

吉備の考古学講座

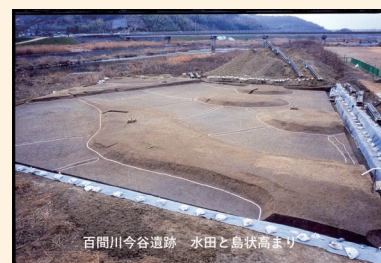
県立図書館多目的ホールを会場として、県立図書館と共催の「吉備の考古学講座」を計3回開催しました。各回とも事前申込が必要でしたが、募集期間の前半に80名の定員に達するなど、皆様の関心の高さが伺える講座となりました。

今年度は当センター職員が日々の業務で培った知識や知見、さらに現在研究中のテーマなどを題材として「吉備の歴史」について発表しました。また今回初めての試みとして、発表者を含めたセンター職員3名によるディスカッションを行いました。これは参加者から集めた発表に対する質問への回答に加え、発表内容を深めるために3名での質疑をライブで行うという形をとりました。この試みについては、参加者から「発表内容がより理解できた」・「職員同士のやりとりを聞いて面白かった」など好意的な御感想をいただきました。これからも考古学を「楽しく」・「わかりやすく」伝える方法を考えつつ、県民に愛される考古学を目指してまいりたいと思います。

第1回 「島状高まりの謎」 総括副参事 物部茂樹

9月17日（土曜日）

百間川原尾島遺跡など県南の遺跡で検出される「島状高まり」について、その特徴や構造を詳細に紹介した上で現代の河川の中州に見られる同様な地形を観察することで「島状高まり」の成り立ちを考えてみました。そして弥生時代後期の水田開発の特徴は、地形を上手に利用しながらできる限り労力をかけないで行っていたことにあり、写真とイラストをふんだんに用いながら発表しました。



発表資料の1コマ

第2回 「古代の道を探る」 主事 山口香織

10月8日（土曜日）

古代の主要交通路である山陽道は、赤磐市に所在する高月駅家と珂磨駅家間のルートが諸説あり、そのうち現在の赤磐市可真を通る北まわりルートと岡山市万富を通る南まわりルートを比較検討しました。発表者はGIS（地理情報システム）を活用して、起伏が少ないルートの算出や岡山市大廻小廻山城跡からの眺望を明らかにした上で、周辺の遺跡の様子も勘案しながら両ルートの妥当性などを紹介しました。そして古代山陽道は様々な要素が複雑に絡み合って成立したと述べました。

北まわりルート／南まわりルートの比較

①北まわりルート

- ・通説の案
- ・地形・条里・遺跡立地等を総合的に勘案

②南まわりルート

- ・地形的なコスト（傾斜）が少ない
- ・大廻り小廻り山城から見渡すことができる



発表資料の1コマ

第3回 弥生人のいのり 所長 大橋雅也

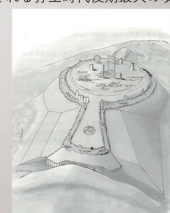
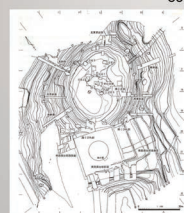
12月11日（日曜日）

弥生時代の土器を用いたマツリについて、集落内や墳墓上で行われたマツリの様子を紹介し、後期後半段階でこれらのマツリの様子が変容したことを示しました。そして後期後葉に成立した特殊器台を用いた祭祀は、集団関係に内在する問題解決のため様々な地域の要素を取り込んだ新しい祭式であり、この祭祀を各集団が共有することで新しい集団関係が結ばれたと論じました。そしてこの集団の象徴であった被葬者のため、モニュメントとして楯築墳丘墓の築造が行われたと推測しました。

4 楯築墳丘墓の創出

— 巨大な墳丘 —

円丘部の2方向に突出部を持つ復元全長83mとされる弥生時代後期最大の墳墓。



(宇垣2021)

発表資料の1コマ

図出典：宇垣匡雅 2021『楯築墳丘墓』

岡山大学文明動態学研究所・岡山大学考古学研究室

津島遺跡やよいまつり

10月22日（土曜日）・23日（日曜日）、岡山市北区いずみ町の県総合グラウンド内にある津島やよい広場と遺跡&スポーツミュージアムを会場として、「津島遺跡やよいまつり」を開催しました。

今年度も新型コロナウイルス感染症対策を取りながら、津島遺跡クイズラリーや、^{まがたま}勾玉づくり・鏡づくり・火起こし・複製磨製石包丁による穂摘み・杵と臼を使用した^{もみ}粳すりなどの古代体験を行いました。今回は岡山県立岡山工業高校の生徒27名がボランティアとして初めて参加し、子供たちが楽しく古代体験ができるように、お兄さんやお姉さんとして様々な補助をしてくれました。



「おかやまの土器たち」＜クイズラリー参加賞のマスキングテープの図案＞



岡山工業高校生徒の古代体験補助の様子（左：粳すり体験、中央：勾玉づくり、右：火起こし）

吉備路ウォーク

令和4年12月3日（土曜日）、吉備路周辺の文化財を巡りその歴史について学ぶ、吉備路ウォークを開催しました。今回は、総社市の国史跡作山古墳・こうもり塚古墳、県史跡江崎古墳の3つの前方後円墳を訪れました。

この日の朝はかなり冷え込みましたが、31名の方が参加され、2班に分かれてウォーキング開始。参加者は、墳丘に登って古墳それぞれの特徴に触れ、こうもり塚古墳では横穴式石室に入り、石室や石棺についても学びました。約2時間のウォーキングを楽しみ、ゴールに着くころには少し汗ばむほどの陽気となっていました。

参加者の方々からは、気持ちのいいハイキング日和で、職員のマニアックな話も分かりやすく面白かった、という声をいただきました。楽しく歴史を学べるイベントとして、今後も開催していきたいと考えています。

（小林有紀子）



作山古墳前方部の斜面にて



住宅地にひっそりたたずむ江崎古墳にて

最新の調査手法

令和5年1月17日（火曜日）から19日（木曜日）、奈良文化財研究所主催の令和4年度文化財担当者専門研修「文化財三次元計測入門課程」が当センターを会場として開催されました。全国各地から埋蔵文化財に関わる担当職員が参加し、三次元計測（立体的なものをデジタルデータ化すること）の基礎と技術に関して講義と実習を受講しました。

埋蔵文化財の調査現場では、三次元計測の利用はすでに広まりつつあります。著名な例としては、奈良県箸墓古墳や大阪府百舌鳥・古市古墳群の航空レーザー測量が知られており、立ち入ることのできない大型前方後円墳の姿が明らかとなりました。また東日本大震災の復興に伴う発掘調査現場では、調査状況の迅速な記録のために三次元計測を活用した例もあります⁽¹⁾。

考古学や発掘調査で用いられる三次元計測の手法では、フォトグラメトリ（写真測量法）が広く用いられています。これはデジタルカメラで撮影した複数の写真をソフトウェアで解析し、もとの形状を復元することで三次元データを得る方法です。フォトグラメトリの優れている点は一般的なデジタルカメラとパソコンがあれば専門的な機材が不要であり、他の手法より低コストで始められること、写真を用いるため遺物や土層の色調の再現性が高いことが挙げられます。一方で、デジタルカメラやパソコンの性能によっては出来映えや精度にばらつきが生じうること、屋外で撮影を行う場合は天候などの影響を受けることには注意しなければなりません。

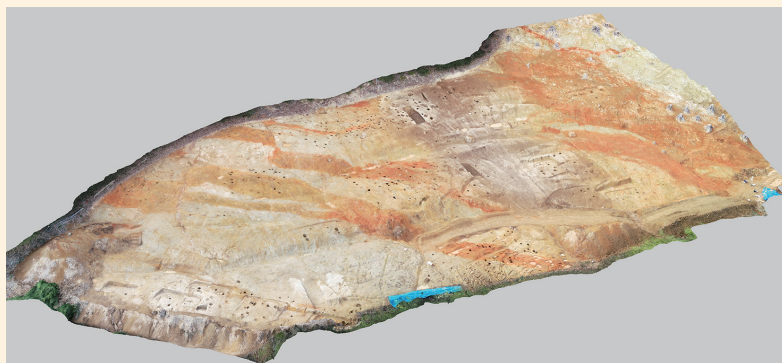
当センターでも、すでにフォトグラメトリの導入と積極的な利用を進めています。これまでの成果として、ドローンと組み合わせた遺跡全体の測量、土器溜まりや集石など広範囲に遺物が広がる遺構の記録などを実施してきました。令和4年に報告書を刊行した倉敷市南山城跡では、土塁の断面を計測・図化して報告書に掲載しています⁽²⁾。

これからの課題として、記録した3Dデータの活用があります。これまでも発掘調査で記録した図面・写真は報告書やホームページで公開してきましたが、専門的な図面は慣れた人でなければもとの形をイメージするのは難しく、写真も紙幅の都合上限られた枚数しか掲載することはできません。一方3Dデータであれば、直感的にご覧いただけること、またウェブで公開ができるため、多くの方に遺跡や出土遺物について知っていただくことができます。

3Dデータは、公開と活用にあたっての課題、あるいはデータの管理にあたっての課題などのハードルはありますが、それらを補って余りあるメリットをもっています。多くの方に埋蔵文化財の価値と魅力をお伝えするため、今後も研鑽を重ねていきたいと思えます。（四田寛人）



研修の風景



フォトグラメトリによる計測の例（津山市高尾北ヤシキ遺跡・総社市こうもり塚古墳単鳳環頭柄頭）

註（1）奈良文化財研究所 2017「第6章 奈良文化財研究所の取組」『東日本大震災の復興と埋蔵文化財保護の取組（報告）－発掘調査の実施と活用への取組編－』文化庁文化財部記念物課

（2）「南山城跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』257 岡山県教育委員会 2022

◆弥生時代後期～古墳時代前期まで連綿と続く墓地の跡

みそのお遺跡は、岡山市北区御津^{うかいがわ}の宇甘川と旭川の合流点より宇甘川をすこしさかのぼった尾根の頂部にありました。御津工業団地の造成に伴って平成2年から3年まで行われた発掘調査で、南北に細長い尾根上約350mにわたり、弥生時代後期前葉から古墳時代の初めまで、尾根の先端から順に切れ目なく連続して作られ続けた墓地が見つっています。

弥生時代後期前葉の墓地は、約8m四方の範囲に4基～14基の墓穴の集まりがあり、それが数か所離れて位置しています。続く後期中葉には墓穴の集まりの外側にまっすぐな石列が設けられ、墓穴の集まる範囲が一目でわかるようになります。さらに後期後葉には集まりの中の墓穴数が増して墓穴が密集するようになり、墓穴の集まりの範囲も近接して重なり合う地点もでてきます。このころから墓穴の中に^{くだたま}管玉などの^{ふくそうひん}副葬品が少数見られます。その後弥生時代後期終末になると、個々の墓穴の大きさがそれまでより大きくなるとともに、1つの集まりの墓穴数は2～7基程度に減少します。副葬品は鉄鏃^{てつそく}などの鉄器が加わります。古墳時代初めでは、墓穴は2～4基ほどになり、石棺を用いるものも出てきます。

このように、みそのお遺跡の調査は、1地域の弥生時代後期の墓地から古墳への変化を継続して表す結果となり、それまでの^{しゅちやうぼ}首長墓を中心とする研究とは異なる貴重な例となりました。

(氏平昭則)



みそのお遺跡の墓地遠景 (北西から)



弥生時代後期後葉の密集する墓穴 (南から)



弥生時代後期終末の墓地 (南から)



編集・発行

岡山県古代吉備文化財センター

所在地 〒701-0136 岡山市北区西花尻 1325-3

TEL (086) 293-3211 FAX (086) 293-0142

<https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/>

<https://www.facebook.com/okayama.pref.kodai>

◎ 交通案内 JR 山陽本線庭瀬駅下車徒歩 40 分

JR 桃太郎線吉備津駅下車徒歩 25 分

◎ 業務時間 AM8:30 ～ PM5:15

◎ 休業日 土・日曜日及び祝日、年末・年始

◎ 展示室の開館 AM9:00 ～ PM5:00

年末・年始を除き、土・日・祝日も開館しています。

ただし、臨時に休館することがあります。